徒然草『九月二十日のころ』定期テスト対策問題｜現代語訳・文法・内容の頻出設問と解答　解答・解説

問1 基本形「る」・受身・連用形。直前の「誘は」が未然形（ア段音）なので助動詞「る」。「ある人に誘われる」の意で受身（誘った主体「ある人に」が示されている）。

問2 謙譲語・補助動詞。動詞「誘はれ」の下に付いて「〜申し上げる」という敬意を添えているので補助動詞。

問3 作者（兼好）から「ある人」への敬意。謙譲語は動作の相手を高める語で、ここでは自分を誘ってくれた「ある人」を高めている。

問4 「（ある人に）お誘いを受け申し上げて」「誘われ申し上げて」。受身＋謙譲を両方訳に出すこと。

問5 基本形「明く」・カ行下二段活用・連体形。下に「まで」（助詞）が続くため連体形「明くる」となっている。「（夜が）明ける」の意。

問6 丁寧語・本動詞（「あり」の丁寧語で「ございます・あります」の意）。地の文の丁寧語なので、読み手（読者）への敬意。

問7 基本形「き」・過去・連体形。「き」は連用形接続で、ラ変動詞「侍り」の連用形に付いている。下に助詞「に」が続くため連体形「し」。自分が直接体験した過去を表す。

問8 普通の語は「思ひ出づ」。「思す」は「思ふ」の尊敬語で、お思い出しになる、の意。尊敬語は動作の主体を高めるので、「ある人」への敬意。

問9 基本形「ぬ」・完了・終止形。「お入りになった」の意。直前の「給ひ」が連用形であることが根拠（完了「ぬ」は連用形接続。打消「ず」の連体形「ぬ」なら未然形に接続し、下に体言などが続くはずである）。

問10 「ことさらに（来客のために）たいたのではない香の匂い」。「わざとなり」＝意図的だ・ことさらだ、の打消。

問11 客が来るからと特別に用意した香りではなく、誰も見ていない日常から香をたいて暮らしていることがうかがわれ、ふだんの心がけ・たしなみの深さが感じられるから。

問12 「たいそう、なんとなくしみじみと趣深い」。「もの」は「なんとなく」の意を添える接頭語。

問13 「優雅だ・上品だ」。家のあるじの暮らしぶり（事ざま）が優雅に感じられた、ということ。

問14 作者（兼好）。「ある人」が帰ったあとも、作者はその家の様子に心引かれて物陰から見ていた。

問15 その家のあるじ（訪問を受けた家の主人）。客を見送ったあとに妻戸を少し押し開けて月を眺めている。

問16 「そのまま・すぐに」。現代語の「やがて」（＝しばらくして・そのうちに）とは異なり、古語では時間をおかず引き続いて、の意。

問17 反実仮想。「ましかば〜まし」で「もし〜だったとしたら、…だろうに」と、事実に反することを仮に想像して述べる言い方（「まし」は未然形＋「ば」と呼応する）。

問18 「（客を見送って）そのまま掛けがねを掛けて（家に）こもってしまったとしたら、残念だったろうに。」実際にはこもらなかったからこそ、作者は感心している。

問19 「か」は係助詞で、ここは反語。結びは推量の助動詞「ん（む）」の連体形。訳「（あとまで見ている人がいるとは）どうして知っていようか、いや、知るはずがない。」（いかでか〜ん＝反語の定番の形）

問20 客を見送ったあとも、すぐに戸締まりをして引きこもったりせず、そのまま月を眺めるような優雅なふるまい。見る人がいなくても変わらない自然な振る舞いを指す。

問21 推量（〜のだろう）。ふだんの心がけが、こうした何気ないふるまいに表れるのだろう、という作者の判断を表す。

問22 イ（あらまほし）。「あり」＋希望の助動詞「まほし」から生まれた形容詞で「そうありたい・理想的だ」の意。ア「あさまし」＝驚きあきれる、ウ「うしろめたし」＝不安だ・気がかりだ、エ「つれづれなり」＝手持ちぶさただ。

問23 「に」＝完了の助動詞「ぬ」の連用形（連用形「失せ」に接続し、下に「けり」が続く）。「けり」＝過去の助動詞「けり」の終止形（「〜と聞き侍りし」とあるとおり、人から伝え聞いた過去）。「失す」＝ここでは「死ぬ・亡くなる」の婉曲表現。

問24 （例）月を眺めていた優雅なあるじが、間もなく亡くなったと短く言い添えて文章を閉じることで、美しい月夜の記憶に人の世の無常の感慨が重なり、読後に深い余情（言い終えたあとまで心に残るしみじみとした味わい）を生んでいる。長々と説明しないからこそ、余情が深くなる。

問25 作者＝兼好法師（吉田兼好・卜部兼好）／成立＝鎌倉時代末期／ジャンル＝随筆。三大随筆の残り二つは『枕草子』（清少納言）と『方丈記』（鴨長明）。